

【旧約聖書日課】エゼキエル書 12章21～28節

²¹また、主の言葉がわたしに臨んだ。²²「人の子よ、イスラエルの土地について伝えられている、『日々は長引くが、幻はすべて消えうせる』というこのことわざは、お前たちにとって一体何か。²³それゆえ、彼らに言いなさい。主なる神はこう言われる。『わたしはこのことわざをやめさせる。彼らは再びイスラエルで、このことわざを用いることはない』と。かえって彼らにこう語りなさい。『その日は近く、幻はすべて実現する。』²⁴もはや、イスラエルの家には、むなしい幻はひとつもない。気休めの占いもない。²⁵なぜなら、主なるわたしが告げる言葉を告げるからであり、それは実現され、もはや、引き延ばされることはない。反逆の家よ、お前たちの生きている時代に、わたしは自分の語ることを実行する、と主なる神は言われる。」

²⁶主の言葉がわたしに臨んだ。²⁷「人の子よ、イスラエルの家は言っているではないか。『彼の見た幻はるか先の時についてであり、その預言は遠い将来についてである』と。²⁸それゆえ、彼らに言いなさい。主なる神はこう言われる。わたしが告げるすべての言葉は、もはや引き延ばされず、実現される、と主なる神は言われる。」

【使徒書日課】テサロニケの信徒への手紙一 1章1～10節

¹パウロ、シルワノ、テモテから、父である神と主イエス・キリストとに結ばれているテサロニケの教会へ。恵みと平和が、あなたがたにあるように。

²わたしたちは、祈りの度に、あなたがたのことを思い起こして、あなたがた一同のことをいつも神に感謝しています。³あなたがたが信仰によって働き、愛のために労苦し、また、わたしたちの主イエス・キリストに対する、希望を持って忍耐していることを、わたしたちは絶えず父である神の御前で心に留めているのです。⁴神に愛されている兄弟たち、あなたがたが神から選ばれたことを、わたしたちは知っています。⁵わたしたちの福音があなたがたに伝えられたのは、ただ言葉だけによらず、力と、聖霊と、強い確信とによったからです。わたしたちがあなたがたのところで、どのようにあなたがたのために働いたかは、御承知のとおりです。⁶そして、あなたがたはひどい苦しみの中で、聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ、わたしたちに倣う者、そして主に倣う者となり、⁷マケドニア州とアカイア州にいるすべての信者の模範となるに至ったのです。⁸主の言葉があなたがたのところから出て、マケドニア州やアカイア州に響き渡ったばかりでなく、神に対するあなたがたの信仰が至るところで伝えられているので、何も付け加えて言う必要はないほどです。⁹彼ら自身がわたしたちについて言い広めているからです。すなわち、わたしたちがあなたがたのところでどのように迎えられたか、また、あなたがたがどのように偶像から離れて神に立ち帰り、生けるまことの神に仕えるようになったか、¹⁰更にまた、どのように御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを。この御子こそ、神が死者の中から復活させた方で、来るべき怒りからわたしたちを救ってくださるイエスです。

【福音書日課】ルカによる福音書 12章35～48節

³⁵「腰に帯を締め、ともし火をともしていなさい。³⁶主人が婚宴から帰って来て戸をたたくとき、すぐに開けようと待っている人のようにしていなさい。³⁷主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。はっきり言うておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。³⁸主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。³⁹このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒がいつやって来るかを知っていたら、自分の家に押し入らせはしないだろう。⁴⁰あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」

⁴¹そこでペトロが、「主よ、このたとえはわたしたちのために話しておられるのですか。それとも、みんなのためですか」と言うと、⁴²主は言われた。「主人が召し使いたちの上に立てて、時間どおりに食べ物や分配させることにした忠実で賢い管理人は、いったいどれだろうか。⁴³主人が帰って来たとき、言われたとおりにしているのを見られる僕は幸いである。⁴⁴確かに言うておくが、主人は彼に全財産を管理させるにちがいない。⁴⁵しかし、もしその僕が、主人の帰りは遅れると思ひ、下男や女中を殴ったり、食べたり飲んだり、酔うようなことになるならば、⁴⁶その僕の主人は予想しない日、思いがけない時に帰って来て、彼を厳しく罰し、不忠実な者たちと同じ目に遭わせる。⁴⁷主人の思いを知りながら何も準備せず、あるいは主人の思いどおりにしなかった僕は、ひどく鞭打たれる。⁴⁸しかし、知らずいいて鞭打たれるようなことをした者は、打たれても少しで済む。すべて多く与えられた者は、多く求められ、多く任された者は、更に多く要求される。」

目を覚ましてお待ちする【こども説教のために】

わたしたちの教会ではなくしてしまった習慣ですが、キリスト教会で礼拝に際してロウソクを灯すのは古くからの伝統です。礼拝堂の聖壇に灯されたロウソクは、そこに神がご臨在され、主イエス・キリストがおいでくださることのしるしとされてきました。わたしたちも、たとえロウソクを灯してなくても、いわば「心のロウソク」をともし、ここにも神がご来臨くださることを信じ、また、主イエス・キリストをお迎えしています。

主イエスはここで、たとえでお語りになられた主人のように、ご自分の腰の帯を締め、わたしたちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくださるのです。それは、主イエスのわたしたちに向けた思いであると同時に、神の御心なのです。わたしたち皆を、神の国の宴会の席に着かせ、自ら給仕をして食事の交わりの中に加えてくださろうと、お考えなのです。

主イエスは、ご自分がいらっしゃらないときには、「あなたがたが腰に帯を締め、ともし火をともしていなさい」とおっしゃいます。それは、いつ主人が帰って来ても良いようにというだけのことではありません。ともし火によって、帰って来られる主イエスがしてくださることをいつも思い起こしながら、主イエスが為さったように、わたしたちも腰に帯を締めて、互いを食卓に着かせ、給仕し合い、交わりを深め合うようになるためなのです。

主に倣う者

先週、わたしたちの教会の交わりの中で歩いてこられた A 姉が 99 歳で逝去されました。教会で葬儀を執り行うことにはなりませんでしたが、生涯を信仰者として歩まれた姉妹でした。戦前の荻窪教会で三代目の信者として洗礼を受けられ、教会で出会われたご夫君と長く信仰の歩みを共にされたのです。そのご夫君が石神井教会に転会されてすぐにお書きくださったものによると、前の教会では誕生日に集まりで何か披露する習慣があったので、いつもご夫妻でリバイバル聖歌を合唱して披露していらしたそうです。石神井教会に転会されてからは、ご夫妻で歌を聞かせてくださるような機会があったのでしょうか。わたしが A 姉のお宅をお訪ねさせていただいた折には、いつも、わたしが用意していった讃美歌では飽き足らず、「もう忘れてしまった」とおっしゃりながら、次々といろいろな讃美歌を思い出されるので、時間を忘れてご一緒に歌わせていただくことができました。

ここ数年、長い信仰生活を歩いてこられた先達を、立て続けに天にお送りしています。年齢順と申すには、少し寂しいものがあります。何よりも、わたしたちは、長い人生をキリスト者として生き抜いた方々から、もっともっと多くのことを受け継いで然るべきなのです。現実には、多くの方が、特に長寿の方ほど、年齢を重ねるごとに相互の交わりから実質的に遠のいてしまわれます。オンラインで礼拝に加わってくださっている方も少なくありませんが、どうしても一方通行で、わたしたちには、一人ひとりのお姿が見えません。そのお一人おひとりが、キリストに従っていかに歩いてこられたのか、どのような生き方をまっとうされようとしているのか、わたしたちは、直接お会いし、ご様子をうかがい、交わりの機会を直接間接に得ることなしには、ほとんど知ることができないでしょう。

わたしたちが日曜日の教会へと集められて来るのは、たしかに礼拝のためです。神の御言葉を聞き、讃美と祈りを共にし、神からの命にあずかります。けれども、もっと端的に言えば、わたしたちは、ここに来て、主イエスというお方に人生を倣おうとしているのです。

「天の父」とお呼びする神にまったく信頼し、「天の父」と心ひとつになることを願って生涯を生き抜かれた主イエスというお方を見て、「これが神の子としての生き方だ」と信じて、わたしたちは、このお方のように生きることを目標にするようにされてきました。「どうして、大昔の外国人のことを信じられるのか」と考える者もいるでしょう。でも、このお方を信じて、このお方の生き方に倣い、生涯を生き抜こうと決意した弟子たちがいました。それに続く者が、二千年間、世界中に広がり、絶えることはありませんでした。その先達の末にいらした方々に、わたしたちも倣おうとしているのです。

主の思いを知ったからには…

「腰に帯を締め、ともし火をともしないさい」。そうおっしゃられたのは、それが、主イエスご自身の生き方そのものであったからなのでしょう。それは、神のご臨在を認めながら、自分自身の足で立って、人々の中で自分の人生の責任をまっとうしようとする生き方に他なりません。何よりも、主イエスにとって、人の人生は、神にがんじがらめにされたようなものではなかったはずで、むしろ、神は、「**彼に全財産を管理させるにちがいない**」というのです。ほぼ百パーセント預けてくださっているのです。

しかし、それは、まるで人が神なしに生きる自由を与えられているかのような状態ではないでしょうか。むしろ、人は、「幼いときから悪い」（創世記 8:21）のですから、あれこれと神の掟に縛られた方がよいのではないのでしょうか。実際、無責任な「神なき時代」を謳歌している現代人の姿を見て、わたしたちは幾度、絶望してきたことでしょうか。わたしたち自身、そのような絶望的な時代の中に取り込まれていることを、どれほど嘆き悲しんできたことでしょうか。「今だけ、金だけ、自分だけ」という世の風潮を、本当に拒めるような者が、わたしたちの中に幾人いるのでしょうか。

「だから、自分たちだけは、この世から距離を置いて、キリストの掟を忠実に実行する者でいよう。そうすれば、主がおいでになられるとき、他の人々は厳しく罰せられるだろうけれども、自分たちは、天の食卓に着かせていただけるに違いない」と考える者もあるかもしれません。ただ、わたしには、少しお気楽すぎる考えに思えます。それでは、「今だけ、金だけ、自分だけ」ならぬ、「終末だけ、教会だけ、自分たちだけ」ではないのか、と。

「**主人が召使たちの上に立てて、時間通りに食べ物**を分配させることにした**忠実で賢い管理人は、いったいだれであろうか**」と、主イエスは問われました。「腰に帯を締め」で生きる者には、使命があるのです。「主人が帰宅するのを待つ使命」ではありません。「自分に託された人々を食事の席に着かせ、彼らに給仕をし、食卓の交わりに加えていく使命」です。

それが、「**主人の思い**」です。主人が人々の中で始められたことです。それが、神の思いであり、主イエスが模範としてお始めくださった生き方なのです。どうしてそうなのかは、わたしたちには分かりません。けれども、主イエスは、神の御心はそのようなものだ、と、わたしたちにお示しくされました。天の祝宴からおいでになられる神は、わたしたちに仕えられるためではなく、わたしたちが命の糧を得るようになるために、自ら腰に帯を締め、お働きくださるのです。主イエスも、わたしたちが命の糧を得るようになるために、自ら腰に帯を締め、お働きくださいました。わたしたちも、ともし火をともし、腰に帯を締めて、そのお働きに倣い行くのです。